瀧井孝作全集

別巻

瀧井孝作全集　別巻
定価四八〇〇円
昭和五十四年十二月十五日印刷
昭和五十四年十二月二十五日発行
著者　瀧井孝作
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
©一九七九　検印廃止

瀧井孝作全集　別巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

年譜　五
著作年表
書誌　二四三
参考文献
全巻内容　二九五
著作索引　三一七
編集後記　三三五
口絵　著者自筆原稿

年　譜

著作年表

書　誌

凡例

一、「年譜・著作年表・書誌」を一括して、各年ごとに年代順に配列した。

二、「著作年表」の表題は原則として初出のものとし、用字は新字体を用いた。

三、俳句、座談会、対談、芥川賞選評は表題のあとに、小説、随筆、評論などの別は「その他」の補足欄に注記した。

四、初出以後、他の刊行物に転載、再録された作品には、表題に再を付して初出と区別した。

五、本全集への収録はイタリック体の数字でその収録巻を示した。

明治二十七年（一八九四）——明治四十一年（一九〇八）

明治二十七年（一八九四）

四月四日、岐阜県飛騨国高山町馬場通（高山市大門町）に、父瀧井新三郎、母ゆきの次男として生れた。祖父與六は大工の棟梁であり、父は大工から指物師となって「名人」と呼ばれた人である。祖父と兄英太郎は和歌、狂句などをたしなんだ。明治三十一年、妹縫が、三十六年、弟洌が生れた。

明治三十三年（一九〇〇）　六歳

高山町尋常小学校に入学。

明治三十九年（一九〇六）　十二歳

五月、母四十一歳、死去。九月、高山町の川上魚市場の店員となった。翌明治四十年八月、兄十八歳、死去。

明治四十一年（一九〇八）　十四歳

二月、祖父八十二歳、死去。七月、弟五歳、死去。魚問屋の隣家の文学青年、柚原畦堇に俳句を教えられた。

この時代が描かれている小説に「弟」「祖父」「父」「澄む」「仏法僧」「ある転機」「桃源の湯」「松倉」「俳人仲間」が、その他に「文学的自叙伝」がある。

明治四十二年（一九〇九）　十五歳

七月、新傾向俳句運動のための全国行脚、『続三千里』の旅で高山を訪れた河東碧梧桐に会った。高山の明治元年生れの俳人福田鋤雲を識る。この福田吉郎兵衛は、大正元年より大正八年九月まで、高山の名誉町長を二期つとめた。

――

碧梧桐先生はこの時三十六歳の壮年で、骨太のがつしりした体格、旅宿の湯上りの浴衣がけで、日にやけた紅い顔、眼ガネの玉もらんらん光つた。その円い大きい眼が異様に赤赤とかがやいて鋭どかつた。私は今迄こんな眼光のはげしい人に出会はなかつたと思つた。予ねて、偉い人と一途に信じて、斯う見えたか、この初対面にすぐに強烈な眼光に打たれた。私は少年で何もえう云はなかつたが、畦堇は、「この折柴君は、いつも先生を神様のやうに崇拝して居ります」とこんな言ひ方で引合せた。（俳人仲間）

表題	発表月日	発表紙誌	その他	収録巻
鵜〔俳句一句〕	7月1日	ホトトギス	第12巻第10号　筆名折柴。地方俳句界欄。	
初めて誌上に掲載された投稿の句で――「たけり鵜の眼燃ゆらん篝哉」				
鴨足草〔俳句一句〕	8月1日	ホトトギス	第12巻第11号　筆名折柴　地方俳句界欄。	
夏柳〔俳句一句〕	8月15日	日本及日本人	第515号　折柴。「続一日一信」の中。	
碧梧桐の「続一日一信・飛驒高山にて」で紹介された少年俳人折柴の句――「漁暦になき赤汐や夏柳」				11

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

清水〔俳句一句〕　9月1日　ホトトギス　第12巻第12号　筆名折柴。地方俳句界欄。
蜩〔俳句一句〕　9月15日　日本及日本人　第517号　筆名折柴。各地俳況欄。
夜長〔俳句一句〕　10月1日　ホトトギス　第13巻第1号　筆名折柴。地方俳句界欄。
花野〔俳句一句〕　10月1日　日本及日本人　第518号　筆名折柴。各地俳況欄。
花芒〔俳句一句〕　11月1日　ホトトギス　第13巻第2号　筆名折柴。地方俳句界欄。
秋の山〔俳句一句〕　11月1日　日本及日本人　第520号　筆名折柴。各地俳況欄。
秋の暮〔俳句一句〕　11月15日　日本及日本人　第521号　筆名折柴。鳴雪選俳句欄。
冬空〔俳句一句〕　12月1日　ホトトギス　第13巻第3号　筆名折柴。露月選俳句欄。
落葉〔俳句一句〕　12月1日　日本及日本人　第522号　筆名折柴。鳴雪選俳句欄。
渡り鳥〔俳句一句〕　12月1日　日本及日本人　第522号　筆名折柴。日本俳句欄。

碧梧桐選の「日本俳句」に初めて選ばれた一句で「峡過ぐと帆の丈長や渡り鳥」。私は、まだ海も知らずに、こんな空想の句を作つたが、この時分には途方もない空想の句が多かつた。――と、「俳人仲間」に記されている。

散る柳〔俳句一句〕　12月1日　日本及日本人　第522号　筆名折柴。各地俳況欄。

明治四十三年（一九一〇）　十六歳

ひきつづき『ホトトギス』『日本及日本人』に投稿、厳選といわれた『日本及日本人』の碧梧桐選「日本俳句」に投稿の句が載るようになった。五月、名古屋、大阪に初旅をした。大阪には叔母竹島寿恵が住んでいた。

大阪に初旅の時、従兄が勤め先を半日ひまもらつて案内して、電車で築港見物に行つた。松島町といふ両側白木の格子構の家家には、入口に椅子一つ出して年増女が、通行の男の顔にいちいち声かけて居た。「ここは松島遊郭や」従兄は電車の窓でニヤニヤして云つた。築港行の電車は、新開の線路が一直線に長かつた。築港の新しい桟橋も歩いて、五月のうす曇りに海も灰色に見えた。築港からまた電車で心斎橋に戻つて、にぎやかな心斎橋通り歩いて、夕方の道頓堀に行つた。それから朝日座の三階で、桃中軒雲右衛門の浪花節をきいた。

（続俳人仲間）

雁〔俳句一句〕　1月1日　ホトトギス　第13巻第4号　筆名折柴。地方俳句界欄。

時雨〔俳句一句〕　1月1日　日本及日本人　第524号　筆名折柴。各地俳況欄。

梅〔俳句一句〕　3月1日　日本及日本人　第528号　筆名折柴。鳴雪選俳句欄。

雪解風〔俳句一句〕　4月1日　ホトトギス　第13巻第7号　筆名折柴。地方俳句界欄。

春寒し〔俳句一句〕　4月1日　日本及日本人　第530号　筆名折柴。各地俳況欄。

啜〔俳句一句〕	4月15日	日本及日本人	第531号	筆名折柴。鳴雪選俳句欄。
絵蠟燭・梅〔俳句二句〕	5月1日	ホトトギス	第13巻第9号	筆名折柴。地方俳句界欄。
水温む〔俳句一句〕	5月1日	日本及日本人	第532号	筆名折柴。日本俳句欄。
炉塞〔俳句二句〕	5月15日	日本及日本人	第533号	筆名折柴。日本俳句欄。
蕗の薹・春の夜〔俳句二句〕	6月1日	ホトトギス	第13巻第10号	筆名折柴。地方俳句界欄。
蛤〔俳句一句〕	6月1日	日本及日本人	第534号	筆名折柴。各地俳況欄。
蕗の薹〔俳句一句〕	6月15日	日本及日本人	第535号	筆名折柴。各地俳況欄。
玉椿・春の月〔俳句二句〕	7月1日	ホトトギス	第13巻第12号	筆名折柴。地方俳句界欄。
短夜〔俳句一句〕	7月15日	日本及日本人	第537号	筆名折柴。青年会五句集。
夕立〔俳句一句〕	8月1日	日本及日本人	第538号	筆名折柴。日本俳句欄。
梅〔俳句一句〕	8月1日	日本及日本人	第538号	筆名折柴。各地俳況欄。
蝙蝠〔俳句三句〕	9月1日	日本及日本人	第540号	筆名折柴。日本俳句欄。
花野〔俳句一句〕	11月1日	日本及日本人	第545号	筆名折柴。日本俳句欄。
秋蚊帳〔俳句一句〕	11月15日	日本及日本人	第546号	筆名折柴。日本俳句欄。
雁〔俳句二句〕	12月1日	日本及日本人	第547号	筆名折柴。日本俳句欄。
紅葉〔俳句二句〕	12月15日	日本及日本人	第548号	筆名折柴。日本俳句欄。
更衣〔俳句一句〕	12月15日	日本及日本人	第548号	筆名折柴。各地俳況欄。

明治四十四年（一九一一）　十七歳

私は、この少年時分には実に日が永かつた。私は十二の年少から十七になつたこれまで五年間、川上魚問屋の店員でどうやら働いてきたが、午前中は魚市で忙しいが、午後は片付けがすむと大方ひまであつた。夜分は自分の時間で、好きな本も読めた。私は俳句が好きで、その勉強して、俳句仲間ができた。

句会の名は初め深山会と云つたが、今は笹魚吟社と名も改めた。笹魚といふのは、平湯峠の笹やぶの中に何年目かに成る笹の実と云はれ、普通の竹の実よりも太くたくましく、笹の枝にウロコの荒い魚が取付いたかたちに見え、平湯温泉の湯治客がミヤゲに持つて帰る例で、平湯の笹魚といはれた。毎月の句会の会報は、『日本及日本人』『ホトトギス』『層雲』などに投稿して、これらの雑誌の地方俳況欄には、飛騨高山の俳句会の存在が毎月はばをきかすほどになつた……

（俳人仲間）

初日・御降・書初・松納〔俳句四句〕　1月1日　日本及日本人　第549号　筆名折柴。日本俳句欄。
白菊〔俳句一句〕　1月1日　日本及日本人　第549号　筆名折柴。各地俳況欄。
鐘〔俳句一句〕　1月15日　日本及日本人　第550号　筆名折柴。各地俳況欄。
冬日〔俳句二句〕　3月1日　日本及日本人　第553号　筆名折柴。各地俳況欄。
待春・白樺〔俳句二句〕　5月1日　日本及日本人　第557号　筆名折柴。各地俳況欄。
墓所守〔俳句一句〕　5月12日　懸葵　第8巻第3号　筆名折柴。各地会報欄。

『懸葵』は明治37年2月、京都で創刊された俳誌。のち俳壇に懸葵派を形成した。

麗か〔俳句一句〕　5月15日　日本及日本人　第558号　筆名折柴。日本俳句欄。

春雪〔俳句二句〕　6月1日　日本及日本人　第559号　筆名折柴。日本俳句欄。
木の芽〔俳句一句〕　6月15日　日本及日本人　第560号　筆名子鵜。各地俳況欄。
麗ら〔俳句一句〕　7月1日　日本及日本人　第561号　筆名折柴。各地俳況欄。
水温む・木の実植〔俳句二句〕　7月10日　層雲　第1巻第3号　筆名折柴。井泉水選「雲層々」

『層雲』は荻原井泉水主宰の俳句雑誌、明治44年4月創刊。この二句は「春季雑吟」に掲載された。

雛〔俳句一句〕　7月15日　日本及日本人　第562号　筆名折柴。日本俳句欄。
螢・夏近し〔俳句三句〕　8月10日　層雲　第1巻第4号　筆名折柴。雲層々欄。
蛙〔俳句一句〕　8月15日　日本及日本人　第564号　筆名折柴。日本俳句欄。
合歓〔俳句一句〕　10月12日　懸葵　第8巻第8号　筆名折柴。各地会報欄。
短夜・薫風・水雞・青梅〔俳句五句〕　10月15日　層雲　第1巻第6号　筆名折柴。雲層々欄。
萩〔俳句三句〕　11月3日　層雲　第1巻第7号　筆名折柴。桜魂子選。
銀杏〔俳句一句〕　12月5日　層雲　第1巻第8号　筆名折柴。乙字選。

明治四十五年・大正元年（一九一二）　十八歳

二月、祖母やす七十七歳、死去。五月、飛騨の白川村への途次、再び高山を訪れた碧梧桐と再会、一身上の相談をした。六月、大阪に出、東区淡路町の江田特許事務所の事務員となる。ここの弁理士江田邦太は読書人であった。七月十二日、大阪の俳誌『紙衣』創刊、同人となる。『紙衣』に拠って句作の傍ら『層雲』『日本及日本人』に俳句を掲載した。

――

ぼくは魚問屋に六年余りゐたが商売は些とも身に沁まず、雑誌や小説よんだり俳句つくつたり、尚ほまた放蕩もして借金も溜つてゐて、何とか身を改めねばならんと考へた。この考への矢先に先生と再会して、この自分の話をブシツケに告げた。

大阪には叔父がゐたが、出奔して来た者勿論国の父にすまんからと叔父は世話せず、ぼくは大阪の俳人の伝手で特許事務所と云ふ所の書生になつた。（文学的自叙伝）

短日〔俳句一句〕　2月11日　層雲　第1巻第11号　筆名折柴。六花選。

日傘〔俳句二句〕　7月12日　紙衣　創刊号　筆名折柴。章四知選。

『紙衣』の編集発行は遠矢射穹（のち瀉丘）。江田特許事務所の瀧井孝作が編集を手伝った。大正4年11月終刊。

扇〔俳句四句〕　8月5日　層雲　第2巻第5号　筆名折柴。

夏の月〔俳句一句〕　8月15日　日本及日本人　第588号　筆名折柴。日本俳句欄。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com